
ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、それだけを知りたい

【NZコード】

N4776Z

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

土砂崩れで死んだ、1人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられている。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか…。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だつたろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに氣分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、一度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世も現世も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思つてゐる。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になつた。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わつた。

在り方も変わつた。

変わらなかつたものなんて、見付かりそうにないくらい変わつた。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・システム。

などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄^{ヤハ}。

「ちいっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ISさえ無ければ、俺のこの第2の人生が狂う事は無かつた。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は 否。

居もしない存在に文句を言つたところで、壁に怒鳴ると同じだ。

そんな無駄な事、してもしちゃうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのでかい。

「…………」

分かり切つていてる。

俺に出来る事なんて、何も無いってべりー。

「…………時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと 初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『エリ学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう一度、同じ言葉を呟いて。

本当の『三人目』

6月終盤。

ここEIS学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となつた時節。

しかして今日の日は、何事も無く過ぎ去る、いへ普通の日。

その筈だった。

「転校生？　また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な筈。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかつたか？」

「いやそんなまさか」

危ねえ。心を読まれた。

「けど、やつぱり1組なのかな？」

そう言つたのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そつらし。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だつたりしてな」

「それこそ有り得んだろ? 男のI.S操縦者は、お前と……」

ちらりと、教室の一 角を一瞥する鈴。

そこには、ラウラとセシリ亞を相手に話しかけているもう一人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆つて……そりや言い過ぎだぞ鈴」

「あのよつな輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

ブイツと顔を背ける鈴。余程あいつが嫌いらしい。

鈴だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるワウワやセシリアも、思いつきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になつて話しかけてるあいつが、何だか可哀想になつてきた。

よし。ソレはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さうげないフォローを

「お前達！ ホームルームだ、さつさと席に着け！」

しようと戻ったところで、千冬姉が出席簿片手に教室に入ってきた。
すまん、無理だった。

刹那、『イグレッシュ・フォースト瞬時加速』ながらの速さで席に戻るクラスメイト達。
すぐえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたあ……」

こつものようにバトンタッチされた山田先生から、こつもと違つ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間が削られたらしく。

「ええっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホールームの前に、転校生を紹介したいと思います……もひほんと勘弁してください、私の睡眠時間が、ああああ……」

今にも処理落ちしそうだ。惨い。

「転校生だとー?」

パン、と立ち上がる音。

振り返つたら、後ろの席であいつ……銀崎が驚いた風に山田先生を見てた。

てか、あいつ知らなかつたんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄い詳しく知つてたから、そういうた情報に関しては通だと思つてたけど

「席に着け、銀崎」

「つと……すいません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出でていた。

「（しかし本当に一組だったな。もう今更だけど、本当に分散させないでいいのか？）」

至極まつとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあつた気がする。

「.....」

無言の入場。あ、これも前にあつたパターンだ。

よし、『P・ラウフ^{パターン}』と名付けよ。今決めた。

うんうん、俺つて結構センスあるんじゃないかな？

「.....」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えて
いる事に気付いた。

何だ？ 今度は『P・シャルル』か？

「…………へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣つて。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なり。

その転校生が 僕が半ば冗談で言つた通り、『男』だったのだ
から。

2人の転生者

さて。俺は今、ひつじょーに困惑している。

え？ 俺は誰かつて？

そんな！ この俺、銀崎飛竜ひりゅうを知らない！？ 寄る年波の所為でボケた神様に間違つて殺され、その侘びとしてここ『インフィニット・ストラトス』の世界に転生させて貰つて、ヒロイン達で構成したハーレムを築く為に日々奮闘しているこの俺を！

……どうにもフラグ立てが難航して、未だ1人も落とせてないけど。

筈や鈴はまあ仕方ないにしても、他の3人はいけると思ったのに。原作ではどうなるにしろ、少なくとも最初の条件は一夏の野郎といーブンだったんだから。

けど実際は、クラス代表決定戦では一夏と違つて俺は専用機到着が間に合わず、結果セシリ亞と戦う事無く棄権。一夏にまんまとフ

ラグを盗られた。

シャルロットとラウラの時だって、何故かいタイミングで必ず何らかの邪魔が入つて撃沈。これが原作の修正力つてやつか！？

だが俺は諦めない！ 元はライトノベルだろうとは現実、アピールを続けなければきっといつかは報われる筈だ！

もつとも彼女達からすれば、同性ゆえに一夏が気安く接してくる俺は、云わば邪魔な存在らしくて邪険に扱われる事もしばしばだけだ。

ああいや、それとも気を引こうと色々やったのが問題だったんだろうか……悩む。

おまけで神様から頭脳や運動神経、それに一夏級のイケメンフェイスを貰つたから、見てくれとかが原因とは思えないが。

……まあいいさ！ 学生生活は始まつたばかり、まだまだチャンスはてんこ盛りだ！

それに例え、今の5人が駄目だったとしても。まだ生徒会長の更識楯無に妹の簪、臨海学校で出会うナターシャさんとか、美人は山ほど居るし！

ちなみに更識姉妹とはまだ接触してない。楯無先輩は迂闊にこちらから接触したら怪しまれかねないし、簪の方は純粋に見当たらぬい。

4組も整備室も結構虱漬しに探してんのに、なんで？ いつも行

つた時居ないんだよな。

仕方ないから、気長に向こうからアクション起こすのを待ってる。

……俺の現状はこれぐらいでいいか。それより今は緊急事態だ。

「では…………自己紹介を、お願いします」

静まり返った教室、電子パネルの前に立つ男。

そう、『男』なのだ。

ラウフよりも長い、腰どころか膝まで伸びた赤髪。

若干吊り上った双眸に収められた、無機質染みた黒い瞳。

ほつそりとした整つた顔立ちに、右眼の下から頬にかけて、ムカデのようなタトゥーが刻まれてる。

普通だつたらあいたた一なその装飾が、とんでもなく様になつてた。

全体的に細身だが、軟弱さや貧弱さがまるで感じられない。

そして極めつけは、着ているその学生服。

HJ学園の男子制服は、一夏や俺が着ている襟元だけ黒く、全体が白の配色がベースだ。

けど赤い髪の男はそれが逆転してて、襟元だけ白く全体が黒の制服姿。

なんかこう、ダークヒーローっぽくてカッコいい。是非真似してえ。

けど簪が好きじゃないなあれ、止めた。

「…………」

とにかく、バカみたいな美形。

あんな見てくれ自然発生するわけねえ。どう見ても俺と同じ『転生者』だ。

「そりだ、そこに決まってる……」

「私語は慎め銀崎」

バコス！

「ぐべらつーーー！」

織斑先生に出席簿で殴られた！ 滅茶痛え！

……と、とにかくだ。あいつが転生者ならば、これから先俺のハーレムを築く障害になりかねない。

ただでさえ難航してるので、これ以上敵が増えるなんて御免だ！

…………！」は一発睨みを利かせておくか。

喰らうえドリゴンアイ！！ 飛竜だけに…！（ただのガン飛ばし）

「…………」

気付かれさえしなかつた。泣きてえ。

つうかこの野郎、何で目にハイライトが無いんだよ！ その所為で何見てんのかさっぱり分かんねえよ…

ああ遣り辛い！ てかいい加減なんか喋れよ！ 「まだですか？」って、山田先生泣きそうになつてんじやん！ 泣いてても可愛い畜生！

それにラウラが「何か転校初日の私を思い出す、鬱だ……」とか落ち込んでるじゃねえか！ 僕の未来のハーレム要員に何しやがる！（現在好感度最低）

これからこのクラスの一員としてやっていく気あんのか？ 無い

なら無いで俺は助かるが。

「…………ふう」

……お？ なぜかく口を開けた。

さあどうなんだ。フレンドリーにするのかしないのか！

「…………」

口を開けて、少々の間を置いて。

紡がれた言葉を聞いて、俺は心底安堵した。

ああ。 こいつクラスに馴染む氣、全く無いや。

気分次第の「ポイントス

「…………雌臭い…………最悪、だな」

教室に入った最初の感想としては、「これが最も適切だろう。

一瞬前と比較してあからさまに空気が凍りついたが、別に気にするような事じやない。

「複数の香水やら「ロロンやらが混ざり合って、花が腐ったような酷い臭いだ。これが普通だと叫ぶのなら、俺は明日からガスマスクを持つてくる必要がある」

「……ふ、ふええ……」

俺の横に居る背の低い副担任……確か山田。

そいつが何か言いたげに涙田で俺を見ているが、生憎発言を改める気は無い。

黒髪の担任は、今のところノータッチを決め込んでいるみたいだしな。

「ああ済まない、自己紹介だつたか？ だがしかし、ただクラスが同じだけの腐臭を放つてゐる輩どもに、果たして名前を教えてやる必要があるのでどうか」

「何といつ暴君、ラウフより酷い」

「銀崎！ 私と比べるな！」

教室の後方に居た男のぼやきにて、眼帯を付けた銀髪のチビが怒鳴る。

……何で小学生が混ざつてるんだ？ 飛び級スキップにしても幼過ぎる気がするが。

「銀崎、ボーデヴィッヒ、黙れ。それとお前も、皿口紹介ぐらいまともにやれ」

流石に皿に余つたらしく、黒髪の担任から咎められた。

けれど足りない。まだ俺の人格を知らしめたせむとは、少しばか

！」

「ふん……自己紹介、自己紹介ね

やる意味は無いが、やらない理由も無い。

そしてやらなければ、いい加減横の副担任が泣きそうだ。

仕方ない。いつものアレで決めよつ。

「こつが表なら、やるとこよつ

ポケットから出したのは、愛用のマイン。

親指に挟んで、弾いた。

ぐるぐると回つ、落ちてきたヒジラをキャッチする。

手の甲と掌で挟まれたそれを

「……………」

祈るような目で見てる山田が居た。

バカなのか」いつ。必死過ぎるだろ？

担任の方は、やはりノータッチだ。

山田に任せてるのかどうか知らないが、少しは助けてやつたらどうだ？

原因である俺が言えた義理ではないが。

「…………う」

どうでもいい事を考えつつコインを見てみれば、表。

これで俺は、自己紹介する事を余儀なくされたわけだ。

「ふん、運が良かつたな」

「はふう～……」

安堵する山田。小動物か。

ポケットにコインを戻し、改めて教室を見据える。

……とは言えど、俺の駄視力では精々人数ぐらいしか把握出来んが。

「担任。血口紹介とは名前だけでいいのか？」

「田上には敬語を使え……散々待たせたんだ、好き嫌いや特技も言え」

「自分勝手だな。まあいい」

よく見えはしないが、恐らく教室内の殆どが「お前が言つた」と思つてゐるのだろう。

俺の最初の発言からして、歓迎ムードとは程遠い空氣だしな。

「久々津・オテサーネクだ。好きなものは無い、嫌いなものはたつた今からお前達だ。特技は絵」

我ながら何とも投げ遣りだな。

当然誰も何も言わない。異質にして異物な俺に対し、持ち得る感情を見失つてゐると言つたところか。

だがこれでいい、これで。

「で、副担任。俺の席はどうじょうかね」

「…………あ、ふえ、はいっ！ あ、ああああそこですっ！」

言葉を失っていた山田が、慌てたように教室の隅を指す。

無言の室内を歩き、俺は席へと向かった。

「な、なんなのあの人……」

「怖いよ……」

ぼそぼそと聞こえてくる囁き。

どれも、俺に対して否定的なものばかり。

「（やうだ、これでいい）」

これで

誰も俺に、近付かない。

「何なのだあの男は！」

食堂のテーブルを叩き、憤慨する簾。

おこ止めりよ、壊れるつて。

「全くですわ！　当然のよつて無礼を振る舞つあの姿勢、氣に入りません！」

「転校当初の私はあれに近い感じだったのか……」

「あ、あはは……」

セシリ亞は簾に全面同意、ラウラは少なからず自分の行いを思い返して落ち込みモード。

例によつて、シャルロットは苦笑氣味だ。

「そんなに酷いわけ？」

「そりやあもう。朝の血口紹介以降全然喋らないし、誰とも戻され
合わせようとしない。山田先生最後の方泣いてたよ」

「あんたには聞いてないのよ銀崎」

「酷い！ セツかく教えてあげたのに…」

唯一クラスが違つ鈴の質問に答えたのは、俺が昼食に誘つた銀崎。

鈴、確かにそれは酷いぞ。

銀崎は結構いい奴なのに……たまにおかしなこと言つたけど。

「…………し、しかも泣いてる山田先生に向かつて何て言つたと想つー？」「ぴいぴい泣くな駄メガネ、鬱陶しい」だよ！？」

「しつこいわねあんたも……けど、確かに引くわその言こと草」

「流石にそのあと千冬姉に叩かれたけどな。山田先生が可哀想だつたよ」

「その様を見て、あいつはあらう事か薄らと笑つていた。最低の男だ」

幕のひと言こ、うんと頷く皆。

……確かに久々津の行いは行き過ぎてる。けど俺としては折角の数少ない男子なんだから、できる事なら仲良くしたい。

そしてその為には、あいつがちゃんとクラスに打ち解けなくちゃならない。

「織斑。あのムカデ野郎と仲良くなんて無理だと思つぜ」

「休み時間の度にどつか行つちまうから、話しあつても切つ掛けがつて、銀崎？俺口に出してた？」

「顔に出てた」

何てこつた。だから千冬姉にも心が読まるのか。

ボーカーフェイスの練習した方がいいか？

「向いてないから止めとけ」

「学校唯一の男友達が冷たい……」

銀崎つて時々辛辣じゃないか？ 主に俺に。

そう思つたら。

「　　「　　「　　」.....」　　「　　」

「ひいっー。『』めんなせーーー。」

何故か銀崎が皆に睨まれてた。

あらう事がシャルロットにまで。びつしたんだ。

「くつ、この気安を.....」

「羨ましいですわ.....」

「むう.....」

「ある意味1番の敵よね.....」

「やはり消すか.....」

「ひいっー。すみません消さなこで下せーーー。」

「ラウラあッ！？ ナイフ仕舞え！」

何故か危うく友達を一人亡くすことになった。

「ラウラの考へてる事は、相変わらずすりぱり分からん。

……他の奴なら分かるのか、と言われても困るけど。

「ところで一夏、『ムカデ野郎』ってなに?」

「え?」

ああそつか。鈴だけクラスが違うから知らないのか。

「転校して30分でクラスに定着した久々津の渾名だ。右田の下にムカデ蛇のタトゥーしてるから」

「蛇?」

「そう! それがムカつくぐらい様になつてゐるのなんのって……爆発しろ!」

「あ、あはは……銀崎君、そこまで言わなくとも……」

人の良いシャルロットが、まあまと銀崎を宥めてた。

……それにしても、やっぱり『シャルロット』って少し長いよな。それに折角の呼び名が普通になつちゃつたし、何か呼びやすい渾名でも考えようか……?

まあ、それに関して今はいいとして

「それにしても、蛇ね……あ、それってあんな感じの？」

「うん？」

鈴が指差した先を向いてみる。

そこには。

「…………」

「「「「「なあつー?」」「」「」「」

何時の間にか、俺達と同じ席でロールパンを食べる久々津が！

俺を含めた鈴以外の全員が、同時に声を上げた。

「あ、あああ貴様ー？　何時からここー？」

「さつきから居た。他に席が空いてなかつたからな」

「え？　本人？」

ラウラの問いに、淡々と答える久々津。

と言つかもしかして、今までの会話全部聞かれてたのか…？

「……お前達が、俺に對して何を思おうが勝手だがな」

聞かれてたよ！　き、氣まずい……。

「ひとつだけ、言つておく

そう言つと、久々津はロールパンを飲み込んで、ゆりりと席を立つた。

そして無機質な黒い眼で、俺達をゆりくつと見回して

「タトゥーは、アカムカ^{ヒカル}テだ」

頬の蛇をひと撫でして。

ぼそりと呟き、行ってしまった。

いや。確かに赤いけれども。

「一夏……俺、あいつのキャラが分からなくなつた」

「奇遇だな銀崎……俺もだ」

「……なんか……やつぱはじから悪い奴だとほ思えないんだ
よな……。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

銀「つーわけで、オリキャラ紹介だ！」

久「……何故俺まで」

? 「諦めなさい。面倒なのは理解しているけれど、これも主の定めた事」

銀「へ？ あんた誰？」

力「私の名前はカーテンコール。神の代行者」

銀「神つてあのボケ爺さんかよ。こんな美人の秘書が居たんなら紹介して欲しかった」

久「神など居ない……下らん」

力「そう思つのはあなたの勝手。けれど私がどう名乗るかも私の勝手。……違つて？」

久「……好きにすればいい」

力「聞き分けの良い子は好き。あなたのような暗い目をした子は特に」

久「……お前。俺をどこまで知っている」

力「すべてよ。可哀想なキメラの子」

久「
.....」

銀「なんか前書きにあるまじきシリアルスなんだけど.....」

オリジナルキャラクター紹介

名前：久々津・オテサー・ネク
年齢：15歳（生年月日不明）
身長：175センチ
体重：54キロ
血液型：A B

容姿：膝まで伸ばした血のよう赤い髪、光の無い無機質な黒い瞳を持つ。一切の贅肉と無駄な筋肉を削ぎ落とした、柳のような体つき。右目の下に、赤で彩られた蛇のタトゥーを刻んでいる。

出身：不明

帰属国家：無し

転生者。出鱈目の履歴で過去の全てを覆い隠された、正体不明の

人物。他人を寄せ付けず、意図的な言動で人を突き放している。世間的には『世界で3番目の中性IS操縦者』とされているが、その不透明な出自から、専用機を与えられている他の2名とは異なり、反逆の恐れありとしてISに搭乗することを許されていない。生体データを取る為の保護という形で学園に通わされているので、授業への出席は義務付けられていない。又、学園の外へ出る事も不許可となっている。

IS適性なし。

イメージCV：関俊彦

(『最遊記RELOAD』「玄奘三蔵」)

機動戦士ガンダムSEED「ラウ・ル・クルーゼ」など)

イメージソング：『Over the clouds』

(『GOD EATER』OP)

名前：銀崎飛竜

ぎんざきひりゅう

年齢：16歳（4月30日生まれ）

身長：172センチ

体重：60キロ

血液型：O

容姿：茶色の短髪に赤い瞳のイケメン。中肉中背だがしつかりと筋肉は付いている。

出身：日本

帰属国家：日本

『世界で2番目の男性IS操縦者』にして、神の手による転生者。原作キャラクターによるハーレムを目指しているが、いかんせん間が悪く空回りしている。一夏とは友好的な関係を築いており、それが彼女達との溝を深めている。悪い人間ではないのだが、その生来の在り方からか3枚目と称されており、女子生徒達からの評価は「友達にはいいけど恋人にはちょっと……」らしい。

母の勤め先である、とあるIS企業にテストパイロットとして所属している。実はラウラより強い。

IS適性はS。

専用機は4脚型IS『牙神』。

イメージCV：森田成一

(BLEACH「黒崎一護」

戦国BASARA「前田慶次」など)

イメージソング : BRAND NEW
("ZONE PIECE POP") WORLD

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

銀「……なんか、俺とムカデ野郎とで紹介文の温度差がすごい違うんですけど」

久「知るか」

力「それもまた定め。世界に『えられた役目』の違い」

久「…………俺に、役目など……」

力「きっとあるわ。私には、まだ見えないけれど」

久「…………」

力「迷つて。迷子の果てに見つけるものもあるのだから」

銀「俺もこの前道に迷つたら、いい店見つけたぜ！」

久「…………ふん」

力「愛しい子。抱き締めさせてくれないのが、とても残念」

久「願い下げだ」

銀「はーいはーい！ 僕24時間受付中ですから！ もうバシバシ
来ちゃっていいから！」

力「ふふ……ああ、残念。もう時間みたい」

久「.....」

力「私は、行かない。また会える事を、切に祈っています」

銀「ちよ、帰る前にハグハグさせてー！」

力「ボケた神の秘書も、結構辛かつたりしますのです」

銀「最後なんかはっちゃけた！？」

久「.....」

銀「ぐおお、行っちゃった.....」

久「.....役目.....か」

「おはよう、諸君。ホームルームを始める……久々津はどうした?」

「来てませんけど……」

久々津がI.S学園に転入して、3日。

初日以降、彼が教室に来る事は無くなっていた。

学園の一角、木々の生い茂る森林地帯。

その中にある開けた空き地の中央、そこに置かれたひとつのベンチ。

まるで隠れ家のような、そんな背景の中で。

「…………」

久々津は一人、絵を描いていた。

ベンチに腰掛け、眼前のキャンバスに筆を走らせる。

彼が描いているのは、いわゆる抽象画と呼ばれる類のもので、それが何を顯わしているのかは定かでない。

意味を知るのは、彼自身のみだった。

「……そろそろ仕上げか」

呴きながら、キャンバスに色を重ねる。

赤、青、黄、紫、白、黒、緑。

統一性の感じられない彩り。傍から見れば、絵とさえ呼べないような色の羅列。

それでも久々津にしてみれば、しっかりと意味のある配色らしい。時折筆を止め、少しばかり齒むきつい眉根を寄せていた。

「…………

……何故彼が、授業にも出ずにこのよつた事をしているのか。

それは、言つてしまえば簡単な理由である。

久々津には、元々授業への出席義務が無いのだ。

世界で3番目の中性IS操縦者、久々津・オテサー・ネク。

しかし彼は、その過去があまりにも不透明であった。

戸籍さえ存在しない、何ひとつ身元を明らかにするものを持たない異分子。発見当初はテロリストの疑いさえ掛けられていた。

結局その疑いは杞憂だったのだが、IS学園を擁する日本政府にしてみれば、久々津の存在はいつ爆発するかも分からぬ爆弾のようなもの。

故に学園へ所属はさせてもISへの搭乗を不許可とし、純粹な生体データのサンプル 悪い言葉で言えば、『実験体』の役目を彼に与えた。

この事は、織斑千冬を始め一般教員には知られていない。非道

な事であると、承知しているからである。

更に言えば、久々津には外出許可さえ無い。IJKの学園の敷地から出る事も出来ないのだ。

授業の免除は、そのせめてもの代償であった。

「ん……」

久々津としても、この扱いに不満があるかと問われれば、「ない」と素直には言えない。

けれどここ以外に行くあてがあつた訳でもなく、根なし草のままでいれば男性IJK適性者のデータを喉から手が出るほど欲しがつている研究施設等から、延々と逃げ続けなければならぬ。

それは御免だった。

「…………」

絵具まみれのキャンバスに、横一線の青が入る。

……居たくてここに居る訳じゃない。

……ここに居る事を余儀なくされたのだ。

真綿で首を絞められていふよつだと、久々津は口の端に冷たい笑みを浮かべる。

ぐひゃぐひゃの絵が、完成した。

「…………寝るか」

キャンバスをそのままに、ベンチの上で横になる。

瞼を閉じながら、ふと思つた。

「何でこんなとこに、ベンチなんか置いてあるんだ……？」

「こは学園の敷地内でもかなり隅の方に位置している。

ついでに言えば、辺りには木が立ち並んでおり、外からこの場所が見える事は無い。

久々津のようにたまたま通り着くか、この場所自体を知つていなければ、決して利用される事は無いだろう。

まるで、そう意図して作ったような場所だった。

「ふん……まあいいか。口当たりは申し分ないし、何より静かで絵を描くには一度いい。誰も使ってないんなら、俺が使えばいいだけ

の「」

下りないと思考を切り、久々津はそっと瞼を閉じる。

そよ風に身を預けた彼が眠りに就くのに、そう時間は必要なかつた。

久々津の眠るベンチの背凭れ。

その後ろ側には、隅の方に小さくいつ刻まれていた。

『たてなしせんよひ』、と。

放課後の校舎内。

人気もまばらな廊下の中、積み重なった書類を抱えて運ぶ少女が居た。

「ふう……」

長い髪を二つ編みに結い、眼鏡をかけた姿。

如何にも真面目そうな雰囲気を漂わせている彼女の名は、布仏虚。

このHHS学生徒会の一員として、とある家の『お手伝い』の役目を担っている。

「まったく、お嬢様にも困ったものだわ……すぐ遊びに行っちゃうんだから。仕事が溜まつて泣くのは自分なのに」

書類の束が重いのか、やや覚束ない足取りで歩く虚。

『でもいいが、名前の読みは『ウツモ』である。断じて『ホロウ』では無い。』

「本音は居ても仕事にならないし、人手は足りないし……はあ

ひとつ嘆息した後、虚は重厚な開き戸の前で足を止めた。

『生徒会室』と書かれたその扉を、書類を抱えたまま器用に開ける。

「会長、追加の書類をお持ちしましたよ。今やつてる分は終わり

」

室内に入り、そこに居る筈の人物に話しかけて　言い終える前に気付いた。

しんと静まり返った生徒会室、そこには誰も居ない事に。

「会長……お嬢様？」

会長卓には、先程『会長』であり『お嬢様』が泣きながら片付け

ていた書類が、積み上がったまま。

更にその傍らに、書類でないメモ用紙が一枚、ぽつんと置かれていた。

虚は書類を手近な机に乗せると、嫌な予感で震え始めた手を伸ばし、その紙きれを手に取る。

『じめんね虚ちゃん、てへぺろつ

』

「…………ツ」

小筆で書いたであるひつ達筆。

そのくせ可愛らしい文面なのが非常に腹立たしい。

最後の『』がどれだけ人の怒りを煽っているか、当の本人は理解しているのだろうか。

ぶるぶると、直前までは明らかに異なる理由で震える虚。

すうと大きく息を吸い。

びりびりと紙きれを破り捨て。

キャラクターを崩壊させ、咆哮した。

「お、アーリー…………やつが怒り狂ったわね」

学園中に轟いたであろうその絶叫に些か目を丸くしつつ、音源の校舎を見上げる澄んだ水色の髪をした少女。

その名を更識楯無。このIIS学園で『最強』の称号でもある『生徒会長』だ。

「でも私は謝らない！」 だってあんな量の書類、絶対片付かないか

「……そして生徒会室にも戻らない！　怒った處ちゃんが物凄く怖いから！」

ビジジーと無駄にポーズを決め、かつて悪い事を堂々と宣言する。

ちよつと通りすがた下級生の目が、氷よりも冷たかった。

「……や、逃げましよう。何時までもこんなところに居たら、見付かって殺されちゃうわ」

比喩でも何でもなく、今の虚に捕まれば彼女は殺されるだろ。

取り合えず怒りのほどどまりが冷めるまでは、何処かに身を隠すべきだと楯無は割と真剣に思った。

「部屋には戻れないわね、籠城に向かない構造だし。かと言つて余りつらぢりしても、捕まらない保証は無い……」

「悩むぐらいなら逃げ出さなければ良かつたのだが、それ以上に書類が嫌だった。」

せつてもやつても沸いて出る。「キブリよつ性質が悪い。

命を賭けてでも、逃げる方がまだマシだったのだ。

あくまで櫛無にとっては、だが。

「……うん、やつぱり『あそこ』かしら。虚ちゃんも知らないし、隠れるには」

『ビードバ会長オオオオオオツ！……』

本でも投げたのか、生徒会室のガラスが割れた。

櫛無の頬から、つうと一筋冷や汗が流れる。

「やつぱり、『てへぺろつ』は余計だつたかしら……？」

逃げた事自体が原因と思われる。

少しばかりの乾いた笑みと共に、櫛無は黄昏時の中へと消えて行くのだった……。

銀崎飛竜 専用機紹介（前書き）

銀「よう、何だかあんまり出番のない銀崎飛竜だ」

久「…………」

銀「相変わらず不愛想なムカデ野郎だぜ。で、美人秘書のカーテン
コールさんは？」

久「……今日は居ないそうだ」

銀「ええええっ！？ そんな、じちとらあの人だけが楽しみでこ
んな前書きくんだりまで出張して来たつてのに……」

久「どうでもいい。さつさと本題に入れ」

銀「神は死んだ……ボケてるだけでまだ元気だけど」

銀崎飛竜 専用機紹介

名称：『牙神』
きばがみ

世代：第3世代

系統：近・中距離タイプ、4脚型

製造元：シユライ・キサラギ社（日本）

操縦者：銀崎飛竜

スペック S～F

火力 S

装甲 A

機動力 C

飛行速度 D

エネルギー効率 B

射程 B

操縦難易度 S

シールドエネルギー総量 900

『ISは人型である』という固定概念を捨て、獣の形状を模した最初の機体。紫のカラーリングが施された、狼のような外見をしている。現行ISの中で最も巨大、4メートル近い体躯を持つ。手動ではなくイメージ・インターフェースによる精神操作により動かしている為、その操縦難易度は極めて高い。又、大きさと形状からISの中では機動力にも欠けるが、その分より大型の武装を複数装備可能、4脚による射撃姿勢の安定などメリットも大きく、飛び抜けた火力を誇る。背面装甲から操縦者を露出させ、狙撃をする事も可能。

待機状態は紫のブレスレット。

武装

肩面装備200mmレールガン×2

高周波振動クロー×4

頭部口腔内装備12連装グレネードランチャー

尾型プラズマブレード

側面装備45mmガトリングガン片面6門×2

腹部装備5連装中型誘導ミサイル

緊急用衝撃波発生装置『エスケープ』

65口径スナイパーライフル『ノブナガ』

3連装口ゲットランチャー『ユキムラ』

銀崎飛竜 専用機紹介（後書き）

銀「ま、見た目的にはMGS4のクライニング・ウルフが使ってた奴みたいな感じだ」

久「馬鹿のような火力だな……それに殆どが装甲にくつついてる形か」

銀「滅茶苦茶強いぜ！ 小回り利かないし実弾装備ばつかだから、ラウラの停止結界とは相性最悪だけどな！」

久「IS自体がイメージ・インターフェースにより操作される……こんなものがよく扱えたものだ」

銀「凄いっしょ！？ なんかIS適性がうじやないとまともに動かせないらしいけど」

久「……むやみに性能だけを追求したバカが、後先考えずに弄ったんだろ？よ」

銀「使い難いのなんのって。火力すげえけど」

「.....」

怒り狂う幼馴染からの逃亡を図った樋無は、人目を気にしつつある場所に向かっていた。

そこは誰も知らない、彼女だけの秘密の場所。

去年の終わり頃にこいつそりと作つた、憩いの場であつた。

楯無がこのI.S学園の生徒会長に就任したのは、1年の中頃。

それは対暗部用暗部組織、『更識』の17代目当主である彼女にとって、生徒会長に与えられる数々の権限がとても便利なものだったからだ。

元々快樂主義的な一面もあり、日々を楽しむ為にその権限をちよつとだけ悪用する事もあれど、基本的には『更識』として『生徒会長』^{チカラ}として、その権力を使う。

そんな特異な彼女には、『気付けば『1人の時間』』というものが無くなっていた。

……別段、孤独が好きな訳では無い。

けれどどうしても1人で居たい時ぐらい、彼女にだつてある。

寮は相部屋だし、どこに居ようと人目につく。

生徒会長とは、I.S学園で『最強』の称号。それを欲して襲いかつてる生徒も少なくない。

故に楯無は考えた。

ならば1人になれる場所を作ろうとした。

学園の敷地内をくまなく探し、木々に囲まれた空き地を見付けた。

そして夜中にひとり備品のベンチをひとつ頂戴し、その場所に運んだ。

以来そこは、楯無だけの場所になった。

疲れた時、眠い時、のんびりしたい時。

そして 泣きたい時。

『更識家当主』でも無く、『生徒会長』でも無く、『更識楯無』でも無く。

かつてあった本当の自分。幾重もの仮面に覆われ守られた、『×』として。

自分が偽りない自分で居られる、唯一の場所となつた。

「ふんふん」

機嫌良く鼻歌を歌いながら、楯無は歩いて行く。

仮面を捨てられる、その場所へ。

歩く事、十数分。

林を抜け、開けた空地へ出る。

「…………え？」

足を止め、見えたものに楯無は目を丸くした。

空き地の中央に置かれたベンチ。

そこには、居る筈の無い自分以外の人間が居たのだから。

「…………」

異様なまでに長い、どす黒い赤髪。

不健康そうな青白い肌、相反する黒瞳。

右目の下には特徴的な赤い蛇の刺青。

身長は一見やや低く見えるが、よく見れば組まれた脚が長い。座高が低いだけで、実際には175センチくらいあるだろう。

そんな特徴的な容姿をした、黒と白の逆転した学生服を着こんだ男子生徒が、ベンチに座つて本を読んでいた。

「…………？」

ふつと、彼の顔が上がる。

その暗い双眸が、ゆっくりと樋無に向けられた。

重ねた仮面の奥底に、自分を仕舞い込んだ少女。

人を遠ざけ、己を夜闇で包み隠した青年。

赤い蛇と蒼い少女の、最初の邂逅。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776z/>

ただ、それだけを知りたい

2011年12月21日21時52分発行